

郁達夫と孫荃・王映霞

家・家族・愛の視点から (下の1)

高橋みつる

Mitsuru TAKAHASHI

国語教育講座

7, 結婚披露宴の秘話

郁達夫と王映霞が、結婚披露宴を経ていっしょに暮らし始めたのは、1928年春からである。この結婚披露宴に関しては、次のような裏話がある。

王映霞の記憶によれば、二人は1928年春に結婚することにし、場所について熟慮した結果、日本の東京で行うことに決めた。招待状には、2月21日に日本東京の精養軒で結婚すると印刷して、国内外の親戚友人に発送した。ところが、その時になって、経済的な理由で郁達夫が東京には行かないと言い出した。しかし、王映霞の祖父と母が承知しないことも心配して、王映霞との相談の結果、2月初めから北駅付近の小さな旅館で1ヶ月余り隠れ暮らし、3月中旬になってやっと民厚南里に帰ってきた。それからまもなく、南京路の東亜飯店で2卓の客を招待したのが、実質上彼らの結婚披露宴となった。

この一連の経緯で疑問に感じるのは、まず、上海に住んでいる二人が何故日本にまで行って結婚披露をしなければならぬか、ということである。中国に住んでいて、披露宴に出席するために東京まで出かけて行く人が何人もいるとは考えられない。郁達夫には日本に多くの知り合いがいたにしても、やはり不思議に思うところである。その点について、孫百剛も当時二人から招待状を受け取ったとき不可解に思ったと記している。⁷¹次に、急遽東京行きを取りやめたのは、王映霞が言うように単に経済的理由によるものであろうか。なぜ、東京での披露宴を取りやめたことを公表せず、1ヶ月も隠れている必要があったのか。

もう一つ、1928年3月9日付佐藤春夫宛の郁達夫書簡の存在がある。王映霞は、ある日本人留学生の翻訳(手紙の原文は日本語)を読んで、事実と異なる内容の一段があることを指摘している。⁷²問題の箇所を、以下に原文より抜粋する。

いそいそと日本に出掛けたのだが、登船早々そのすぢの嫌疑を受け、長崎に行った処で上陸され得るや疑問なので、旅行を見合はした。⁷³

この文面からは、郁達夫は日本に向かうため乗船した後に旅行を取りやめた、と読み取れるが、王映霞は

このときそのような事実、つまり彼が日本行きの船に乗った事実はなかったと、きっぱりと否定している。そして、この部分は郁達夫の「想定」⁷⁴と考えてよいであろう、と結論づけている。

手紙が書かれたのが3月9日で、結婚披露宴の予定日が2月21日であったことから考えると、「いそいそと日本に出掛けた」とされているのは、結婚披露宴を催すための渡航であったはずである。郁達夫が、佐藤春夫にこのような一種の嘘をついたのはなぜなのか。

羅以民⁷⁵は、この結婚披露宴をめぐる不可解な行動を、次のように解釈している。

東京行を中止したのは、郁達夫の当時の執筆状況や生活水準から推測して、王映霞が言うような経済的理由とは考えられない。また、佐藤春夫宛書簡の当該部分も、完全に人の耳目を眩ますためのものである。つまり、「郁達夫が日本に行ったように装って、実は上海北駅に1ヶ月余り隠れ住んでいたのは、王映霞の家には『結婚した』と説明し、世間に対しては『再婚していない』と思わせるためであった。』⁷⁶郁達夫が王映霞との結婚を公表することに及び腰だったのは、第一夫人孫荃と離婚していなかったからである。

羅以民のこのような推理は、斬新で興味深いものである。しかし、郁達夫が東京での披露宴を決めた当初から、このような方法で王家と世間を欺くつもりだったとまで考えるのは、やや穿ちすぎではなからうか。

結婚披露宴を東京で行うことを提案したのは、やはり郁達夫であろう。求愛時代の日記に、渡欧の夢を綴っていた郁達夫であるから、距離も近く、交通費も安い日本を、拳式・ハネムーンの地として思いつくことは、不自然ではない。彼にとっては、青春時代を過ごした思い出の地であり、知人友人も数多くいる。旧友との再会というもう一つの楽しみもあったに違いない。あるいは、羅以民の言うように、郁家の反対の中、妻がいる国内で大々的に結婚式を挙げるのは都合が悪い、という一方の事情もあったかもしれない。

この計画が、王映霞にとって望ましいものであったかどうかは不明である。しかし、彼女にも日本に住む友人はいたし、前年1927年7月には、郁達夫が杭州に案内してきた佐藤春夫夫妻と会い、いっしょに西湖に遊んだり、自宅に招待したりと、親しく交流している。⁷⁷そのような経験があったことも考慮すると、国内

の親戚友人の前で盛大な結婚式を挙げられないことは残念だったのであろうが、郁達夫の提案に対して抵抗感はあるほどなかったのではないかと考えられる。むしろ、海外への蜜月旅行という計画は、王映霞にとっても魅力的なものであったかもしれない。

さて、郁達夫が日本に行くつもりであったことは、彼が佐藤智慧子に宛てた葉書の文面からも窺い知ることができる。書かれたのは、1928年1月13日、智慧子の年賀状への返信と思われる。

.....お兄様もお姉様も御達者でいらっしゃいますか？ 僕たちは日本に行きますよ、大抵二月の中頃かと思えます。...中略... まづ皆な無事にくらしていますから御安心の程、御通知致します、後は拝顔の上にて。⁷⁸

渡航予定の約1ヶ月前の時点で、佐藤智慧子に日本での再会を予告したこの葉書が、全くの社交辞令、まして偽装であったとは、考えられない。

では、なぜ土壇場で中止したのか。羅以民は経済的な理由の可能性を否定しているが、陳福亮は、収入も少なくはなかったが、恋愛中の男女のこと、支出もまた多く、せつかくの貯金もデートに使ってしまい、旅費が足りなくなってしまう、と記述している。⁷⁹郁達夫の遊び好きと気前の良さはよく知られているところであり、無計画に使っているうちに、海外旅行どころではなくなった、ということはある得なくはない。⁸⁰また、王映霞はそれより前に発表した文章「半生自述」において、異なる経緯を述べている。それによれば、結婚式の招待状を発送してまもなく、当局の嫌疑を受けたため、すでに購入していた船の切符もすぐさまキャンセルして、郊外の旅館に避難した、という。⁸¹経済説、時局説、どちらが事実なのか。なぜ、わずか数年で記述内容が変化したのか。このような人生の一大事でありながら、その記憶が曖昧で混乱したとも考えにくい。あるいは、両方の事態が出現したのかもしれない。

佐藤春夫宛て書簡に戻るが、郁達夫が偽りの報告をしたのは、出国自体を取りやめたと事実を話したのは、再会を心待ちにしてくれている彼らに対して申し訳ないし、郁達夫もばつが悪い。そこで、行こうとはしたけれど、やむを得ず取りやめた、と苦しい言い訳で取り繕ったのであろう。

冒頭でも述べたとおり、郁達夫と王映霞は1ヶ月余りの潜伏後、上海で改めて披露宴を催した。しかし、このときの招待客は2卓分のごく親しい人たちばかりで、おそらく当時の郁達夫の名声からすれば不似合いなくらい、ごちんまりしたものであったと思われる。このような規模にしたのは、彼らの台所事情にも関係していよう。そして、王映霞の家に対して、このよう

な規模で済ませられたのは、日本で挙式した、という前提があったからであろう。

1ヶ月以上の不自由な生活を強いられても、日本での挙式中止を隠そうとしたのはなぜか。「半生自述」の通り、時局上の必要であれば、もちろん当然であるが、経済的な理由であったならば、第一義的には王映霞の母親と祖父の叱責や落胆を恐れての行動であろう。また、多くの知人に招待状を送り、海外での挙式を公表した手前、行かなかったと知られるのは、やはりきまりが悪かったのであろう。少なくとも、羅以民が述べるように、郁達夫が重婚の誹りを恐れて、王映霞とは結婚していない、と見せかけるためだったとは考えられない。そうであったならば、後に二人の仲が決定的に悪化して、王映霞が郁達夫を非難したとき、必ずやこの問題に言及したであろうからである。

孫百剛は、不可解な結婚式招待状について、王映霞が、妾ではなく妻の地位を手に入れるために主張したものであろうと推測している。⁸²確かに、実際には出席できないと予想される人に招待状を送るという行為には、結婚式を挙げる、それも海外の日本で、ということを宣伝したいという心理が働いていた、と見ることもできよう。

8、新婚生活

王映霞によれば、それから3、4ヶ月後、祖父とともに赫徳路嘉禾里に転居⁸³さらに1929年祖父の杭州帰還に伴い、祖父が借りていた1442号に移って、二人の本格的な家庭生活が開始した。

『半生雑憶』や『王映霞自伝』には、貧しいながらも精神的に満ち足りていた新婚生活の思い出が語られている。仲睦まじい二人の様子や王映霞のかがいしい主婦ぶりは、当時彼らと交流のあった人々も、後世の論者もともに認めるところである。

たとえば、許鳳才は、謝冰瑩『追念郁達夫先生』の一節を引用した後、次のように述べている。

王映霞の細心の世話がなかったら、郁達夫は健康な体と安心で心地よい創作環境を得ることはできなかったであろう。この期間の彼の創作には、間違いなく王映霞の多くの血と汗が注がれている。⁸⁴

さらに、孫百剛『郁達夫外伝』の第8章「美満家庭」をも引いて、王映霞の内助の功を、以下のように評価している。

孫百剛の描写から、少なくとも二つのことがわかる。一つは、郁達夫は王映霞と結婚後、確かに夫婦円満で幸福であった。二つめは、王映霞の郁達夫に対する愛も、郁達夫の彼女に対する愛と同

様に、誠実で純粋であり、王映霞の手厚い保護がなかったら、虚弱で病身の郁達夫は、おそらく早くに各方面からの圧力に耐えきれなくなっていたであろう。

王映霞は、頭が切れ、コミュニケーション能力と各種の煩雑な生活上の瑣事を処理することに優れていた。⁸⁵

ここからは、『王映霞自伝』⁸⁶の記述に基づいて、彼女が郁達夫の文学活動にどのように貢献したかを見てゆきたい。王映霞の果たした役割は、生活次元、つまり「主婦」として支えた側面と、作家の仕事に直接関わる、「秘書」的側面とに大別できよう。

「主婦」としての王映霞が特に腐心したのは、健康と家計であった。

王映霞は、家庭を持つまで料理作りの経験がなかった。食通の達夫の励ましと協力の下、苦手であった毎朝の買い出しにも勇気を出して行き、研究と努力を重ねて、料理の腕を磨いた。食へのこだわりについて、王映霞は郁達夫の説いた哲学に触れて、次のように述べている。

郁達夫は、「人間の体が一番大事だ。体は他人が奪えない財産だ」とも言った。それで、私たちの家では着るものにはこだわらなかったが、ただ飲食にはお金をかけた。そうでなければ、彼の黄疸や肺病は治らなかつただろう。

彼が新婚の頃に説いた料理習得法は、私もなかなか道理があると思ったので、それ以後まじめに調理を学び、彼が大好きな何種類かをはじめ、多くの料理を覚えた。⁸⁷

彼女が身につけた料理の腕前と健康哲学は、許鳳才の指摘通り、持病を抱えていた郁達夫の健康を支えるとともに、友人を自宅に招くなどの社交の場でも大いに発揮されたものと思われる。

当然ながら、郁達夫が病気のときには、王映霞は骨身を惜しまず、看護と世話につとめた。重い黄疸にかかったときには、病後に、杭州の母親に持ってきてもらったアヒルを十数羽食べさせ、さらに鶏肉の煮込みスープを飲ませて、体力の回復をはかった。⁸⁸また、郁達夫が難を避けて小部屋に潜伏中、痔瘻が悪化して手術を受けた。そのとき、食事を運んだり、漢方医への付き添い、薬の塗布や包帯の交換まで、王映霞がそのすべての役割を担った。王映霞は、その頃のことを「家事と育児も気にかかって、一日中休む暇さえない忙しさだったが、私の気持ちは楽しかった」⁸⁹と振り返っている。

王映霞が気遣った夫の健康面で、最も彼女を悩ませたのが、飲酒の節制であった。王映霞との結婚前の日

記には、友人と或いは一人で、酒樓で或いは友人宅や自室で、飲酒したことがしばしば記されている。ときには、したたかに酔っぱらって体調をくずし、猛省して禁酒を誓ったりしている。

王映霞は、過度の飲酒が夫の健康を損ねることを心配して、酒量を減らすように苦心をした。孫百剛によれば、王映霞は「お酒を減らして節約したお金を、たばこ代に充てたい、安物のたばこは、脳をだめにするから」⁹⁰とも語っていたという。王映霞の節酒の願いは、深い思慮と愛情に根ざしていたのである。しかし、節酒を迫る王映霞に、郁達夫は「今回だけ」とか「来月の1日から」と言いながら、結局いつもとことんまで飲んでしまうのであった。王映霞は、「私は、お酒が精神を消耗させ、人柄を変えてしまうことを知っている。お酒を飲むと、あらぬことを口にしたたり、してはならぬ事をしでかしたりしてしまうものである」⁹¹と述べているが、郁達夫にもこのような傾向があったのであろう。アルコール依存症に近い極度の飲酒癖があったものと想像される。

冬のある日、郁達夫は友人と銭湯に出かけて一晩中帰らず、翌朝路上で雪まみれで眠っているところを、見知らぬ人が抱え起こして家まで連れ帰ってくれる、という事件があった。王映霞はこのときの教訓から、友人が責任をもって送り届けてくれることを保証しなければ、郁達夫を外出させないことにした。しかし、この法三章もいつしか効力がなくなり、果ては映霞の取り越し苦労だと恨むようにさえなり、最後には言うことをあきらめてしまった。⁹²

酒量を減らしてほしい王映霞と、お酒を思う存分飲みたい郁達夫との矛盾。王映霞は、「何度も飲酒の問題で、私たちの間に小さな言い争いが起こったが、心を傷つけることも、身を切られるような痛みにも至ることもなく、しばらくすると元通りになった」⁹³と述べている。しかし、やがて王映霞の心を深く傷つけることになる郁達夫のある習癖は、彼の飲酒癖とも大いに関連している。

ともあれ、王映霞の気遣いと努力がなかったら、無節操な飲酒と低級たばこが郁達夫の体を一層むしばんでいたかもしれない。

次に、家庭経営の根幹をなす、家計の問題である。王映霞が心を砕いたのは、収入が不安定な上、家計を顧みない夫の書籍購入癖に対して、どのように経済を維持していくか、ということであった。

所帯を持った当初は、新しい家具を買うことも、電灯を取り付けることもできず、三度の食事も近隣に住んでいた母親の家で食べる、という経済状態であった。そんな中で、王映霞が率先して実行したことは、郁達夫がためていた借金の返済であった。王映霞は、「人に借金をすることは嫌いだったがし、お金を借りて返さないのはもっと嫌だった、だから少々苦しくても

返済してしまう方がよかった。⁹⁴返済先の一つは、内山書店であった。内山書店では、ツケで本を買うことができ、生活不如意のときにも用立ててもらうことができたため、新婚当初、多額の借金があった。王映霞の記憶しているもう一つの返済先は、胡適であった。彼女には郁達夫と胡適との関係はわからないが、結婚前はしばしば胡適から百元、二百元と借りていたらしい。

借金返済の姿勢からも、王映霞の潔癖で堅実な経済感覚がうかがえる。

郁達夫の家では、家計に無頓着な夫に代わり、王映霞が一切の経済の管理を担っていた。郁達夫の収入は、全集と日記を出版していた北新書局からの印税と、その他のこまごました原稿料であった。当時の売れ行きからすれば、印税が約束通りに入れば、生活を維持していくのは困難ではなかった。しかし、北新書局からの送金は、しばしば忘れられたり遅れたりした。そこで、王映霞の仕事は、毎月何度か北新書局に電話をかけて、印税の催促をすることであった。また、北新書局に郁達夫の判を押した印紙を届けるのも、彼女の仕事であった。こうした出版社との交渉は、単なる主婦ではなくて、秘書やマネージャーのような能力を要するものである。たとえば、孫荃にこのような働きを求めることができたか、と考えると、やはり王映霞の果たした役割は大きいと言えよう。

「ときに収入が思ったより多いと、私はひそかに彼のために貯金して、収入が不足したときのための備えとした。」⁹⁵後に、郁達夫たちが杭州に転居し、「風雨茅廬」と名付ける邸宅を建築できたのも、王映霞のこうした地道な努力のおかげであったことは間違いない。孫百剛も、王映霞を権勢と奢侈を好む女性だとする意見に対して、「嘉禾里の6、7年間と杭州場官衙に移り住んでからの数年間、映霞の勤儉節約につとめる様子は、誰の目にも明らかで、達夫の家に行ったことのある友人は、皆映霞のために弁護するであろう」⁹⁶と証言している。郁達夫も、家計の管理については王映霞に全幅の信頼を置いていて、12年間の共同生活において、家計をめぐる異論を唱えたことは一度もないと、王映霞は断言している。

以上、郁達夫の健康と家計を支える上で、主婦王映霞が果たした役割を整理してみた。

すでに触れたが、家計を預かる身として、もう一つ王映霞を困惑させたのが、郁達夫が無類の本好きだったことである。お金が入れば、いそいそと古本屋に出かけていき、気に入ればありったけ買って帰る。お使いを頼まれて、ふと立ち寄った本屋で本を買ってしまい、気がつけばお金を使い果たしていた。このようなことは日常茶飯事であった。

王映霞はこの難題にどう対処したか。「彼の無計画な書籍購入のために、私は家庭の日常の支出が影響を

受けるのではないかと心配した。しかし、比べてみれば、本を買うのはたばこや酒に使うよりかは、はるかによい、私はもう文句を言わないことにした。⁹⁷郁達夫にとって人生至上の楽しみであった読書と飲酒のうち、健康と安全に直結する飲酒には厳しかったが、家計を圧迫するほどの購書癖に対しては、王映霞は比較的寛容であったようである。そして、書籍購入による家計の損失は、家計のやり繰り、主婦としての才覚で補おうとしていた。読書は、ある意味で作家の仕事の基礎をなすものであり、書物は作家の仕事道具でもある。したがって、王映霞の態度は、間接的に郁達夫の執筆活動を支えるものであったともいえる。少なくとも、本を買うという郁達夫の一番の楽しみを奪わなかったのは、王映霞の愛情であり、夫の仕事への理解を示すものと考えられる。

もう一つ、郁達夫の仕事上の活動に対するサポート、それが来客の対応であった。『王映霞自伝』の23章「我家的常客」には、1928～1933年つまり上海時代、郁達夫家の千客万来の様子が描かれている。その頃郁達夫家を訪ねてきたのは、ほとんどが文壇で活躍している若い作家たちで、しかも割合貧しい人が多かった。この章には、丁玲や姚蓬子、沈從文等が登場している。どうやら、郁達夫の家は、彼を慕う若手作家たちのサロンのようになっていたようである。

妻の王映霞は、毎日のようにやって来る大勢の来客のために、いつも朝の買い出しから始まって、5、6人分の昼食の用意をしなければならなかった。客は、朝9時、10時にやって来て、ひとしきりおしゃべりした後、マージャンをして、お酒を飲みながら昼食をとり、暮れ方に帰って行く、というのが常であった。これらの来客をもてなすのに、当然、王映霞の協力は欠かせなかったはずである。王映霞自身は述べていないが、まず、料理。これは、日々の努力の結果、相当に腕を上げており、おいしい料理は、郁達夫家に集う人々にとっても魅力だったことであろう。余裕のある経済ではない中で、家計のやり繰りにも苦労があったのではなかろうか。

郁達夫は、知性と教養があり美貌にも恵まれた年若い妻をどこへ出かけるにも伴った。自宅における作家仲間の集いでも、郁達夫は、単なる料理作りの裏方だけでなく、王映霞が会話の輪に加わることを望んだことと思われる。そして、彼女の物怖じしない性格と洗練された社交術は、そうした場でもその能力を十分に発揮し、交際の広い郁達夫の人間関係を支えることに少なからず貢献したであろう。

ただし、王映霞はそのようなにぎやかな生活を好んでいたわけではないらしい。「私は生来活発であったが、伝統的観念の影響を受けていたために、静かで穏やかな楽しい家庭生活を送りたいと思っていた。これは、郁達夫が広い交友と社会活動への参加を好むこと

と矛盾するものであった』⁹⁸と振り返っている。この言葉は、王映霞の理想とする家庭生活と郁達夫の暮らしぶりに、相容れないものがあったことを示唆している。ともあれ、王映霞は、こうした接客にも、いっしょうけんめい誠実に作家の妻としての務めを果たしたといえることができる。

郁達夫の創作活動と王映霞の関係が語られるとき、必ず『日記九種』と『毀家詩紀』が挙げられる。どちらも郁達夫が王映霞と出会ったからこそ生まれた作品であり、彼女に対する正と負のパッションがその創作の原動力となっている。王映霞は作中における主要登場人物でもある。しかし、彼女は、単に郁達夫作品のモデルとなっただけではない。

新米主婦の王映霞が、まだ毎日の食事作りに悪戦苦闘している頃の思い出である。「郁達夫は、いい文章や気に入った詩句が出来上がると、台所へ降りてきて、私を2階に引っぱっていき、私に一通り読ませてから、おかしくないかどうか尋ねるのである。そのため、私はしばしば食事の準備ができなくなった。⁹⁹」どうやら、新婚の頃、王映霞は郁達夫作品の最初の読者であり、批評家でもあったようである。具体的にどのように関わったかはわからないが、作家郁達夫にとって、妻王映霞は、自分の作品世界を共有できる最も身近な存在であったのであろう。彼女の反応や助言が、彼の作品の彫琢に何らかの影響を与えていることは十分考えられることである。

ここまでは、郁達夫と結婚した王映霞が、作家の妻として主婦として、献身的に郁達夫の作家活動を支え、家庭を守ることに努めたことを、王映霞自身の記述をたどりながら見てきた。

もちろん、王映霞の筆は、自分が為したことだけではなく、夫から学んだこと得たことにも及んでいる。

新婚当時の二人は、よく散歩を楽しんだ。その折のエピソードとして、郁達夫が一輪車¹⁰⁰に乗るのを好んだことを明かしている。王映霞は初めそのような「第四階級」の乗り物に乗るのが恥ずかしかったが、次第にその独特の趣を楽しめるようになった。郁達夫の初期の小説『春風沈酔の晩上』(1924年)や『薄奠』(1924年)にも表れているように、郁達夫には、貧しい階層の人々に対する偏見や差別意識があまりなく、むしろ彼らへの共感や庶民的風趣を自らも楽しもうとするところがある。王映霞の書きぶりから判断すると、そうした彼の気取りのない態度を、彼女は新鮮に感じ、また好ましいと受け止めていたようである。王映霞は、こうした経験を通して、この世界の人々の階層的多様性の一端に触れることとなった。

また、散歩中の王映霞は、しばしば道端の草花や事物について、郁達夫に尋ねた。すると彼は「まるで大人が子どもに対するように、面倒をいとわず懇切丁寧に教えてくれた。」¹⁰¹博学多才の郁達夫が、愛してや

まない妻の質問に、誠心誠意答えるのは当然である。新婚時代の王映霞は、社会経験も浅く、まだ女学生のような純真さを持つ女性であった。従って、学識も人生経験も豊富で、社会的名声も確立していた郁達夫の存在は、まさに知識の宝庫であり、何でも教えてくれる先生、信頼できる人生の導き手でもあったに違いない。

新婚時代を回想する王映霞の文章からは、若かりし日の郁達夫との生活を、懐かしみ愛おしむ気持ちを感じることができる。確かに、貧しいながらも仲睦まじく、精神的に満ち足りた日々があったことを物語っている。

9、家出事件

前章に見てきたような、微笑ましい仲のよい夫婦が、12年後に破局に至ったのは、一体なぜなのか。ここからは、郁達夫研究の中でも議論が多く、見解が分かれている、郁・王二人の不和の原因を考えてゆく。

王映霞は、郁達夫との生活の中で、亀裂が生じた発端を、郁達夫の度重なる家出事件であったとしている。

家出のきっかけは、些細なことが原因であった。郁達夫は、飲酒を止められたり、何か不快なことがあると、ふいに眉間にしわを寄せて、頭を揺すり始め、プイと行き先も告げずに家を出て行った。王映霞が、「病的」「家庭生活の障害」と呼ぶ郁達夫の家出は数え切れないくらいあったが、そうした中で、王映霞は、記憶に強く残る出来事を、3件取り上げている。起こった順番に事件の概略を記して、郁達夫の行動が王映霞にもたらした心理的痛手を検証してみたいと思う。

最初の家出は、1929年夏のことであった。¹⁰²郁達夫の次兄が富陽から来訪したので、王映霞は酒肴でもてなした。酒量もほどほどに達したとき、映霞が酒をどめて「食事にしましょう」と言うと、途端に達夫が機嫌を損ねて、そのまま家を出て行ってしまった。達夫が帰らぬまま、翌朝、次兄は富陽に帰って行ったが、その日の夕暮れ時に、郁達夫から電報が届き、お金と腕時計を盗まれたので、寧波まで100元送金してほしい、という。映霞は、結婚のとき母親から贈られた金の腕輪を質に入れてお金を工面し、すぐに船に乗って寧波に赴いた。そして郁達夫に誘われるままに、共に普陀に遊んだ。郁達夫の弁明によれば、王映霞が飲酒を止めたことに腹を立てて家を飛び出し、十六鋪埠頭まで来たが、着の身着のままそこで眠っている間に腕時計などをなくしてしまったのであった。

2件目は、1931年のことである。¹⁰³郁達夫が突然また黙って姿を消し、王映霞がやり繰り返して貯めた500元もなくなっていた。何の消息もないまま数日が過ぎ、杭州で桐廬行き汽船に乗るのを見かけたという

従姉の手紙を受け取った。王映霞の推測では、上海に飽きた上、節酒をうるさく言われるのが嫌になり、先妻が恋しくなって富陽に帰ったのであった。まもなく、郁達夫は何食わぬ顔で帰ってきた。王映霞の訴えにも誠実に応えないので、彼女は杭州の母親に手紙を書き、母親がすぐに駆けつけてきた。郁達夫と母親との話し合いの結果、郁達夫が保証書を書いて、ひとまずこの事件は落ち着いた。¹⁰⁴

3件目は、1932年1月28日の上海事変後のことである。王映霞の旧友劉懷瑜が上海に来たので、郁達夫はあまり気乗りがしないようであったが、彼と共に旅館に訪ね、郁達夫の勧めで王映霞は旅館に泊まった。翌朝早く来た達夫には、特に変わった様子もなく、朝食・昼食を共にして、午後4時頃車で帰った。ところが、郁達夫はその車にまた乗り込んで、走り去ってしまった。部屋からはふとんが1枚消えており、女中の話では、昨夜郁達夫が、王映霞は人と旅館に泊まって帰って来ない、自分も他所に泊まる、と言ったという。3日後、達夫からの手紙で、腹立ち紛れに出て行って、文章が書き上がったら帰ってくることがわかった。この文章とは、中編小説『她是一個弱女子』のことであった。20日ほど経って、郁達夫はふとんを掲げて帰宅し、何事もなかったかのように生活した。¹⁰⁵

いずれの出奔も、妻の王映霞からすれば、極めて理不尽で、自分勝手な行動といえよう。家庭を守ることに腐心し、夫の安全と健康を心配する、彼女の誠意を踏みにじる行為と感じられたのは、無理もない。それでも、最初の事件は心に傷を負いながらも、己の誤りを自覚している夫を許すことができたようである。

王映霞の心に癒しがたい強い衝撃を与えたのは、2件目の富陽への帰省であった。夫がこっそりと先妻であり正妻でもある孫荃のもとに舞い戻ったと信じている王映霞には、それは、自分の尊厳を踏みにじる許し難い冒瀆行為であった。なぜならば、孫荃と離婚するという約束で結婚したのに、結局別居しただけで、しかも自分は郁達夫の認識において妾とみなされている。騙されたのだ、と思うと、怒りと絶望感に襲われたのであろう。王映霞が、妻子ある郁達夫との結婚を決意したのは、ただ彼の一途な愛情を信じたからであった。そのために、彼女は名誉や家族の信頼など、多くのものを犠牲にした。まさに清水の舞台から飛び降りるような覚悟で、郁達夫との結婚に賭けたのであった。

この事件の後の精神状態を、王映霞は「心の傷は日ごとに深まっていき」、「つくづくと望みのない未来を感じた」と表現している。

ところで、王映霞の親友の陳錫賢が「我所知道的王映霞」という一文の中で、彼女を訪ねてきた王映霞が次のように話したと伝えている。

……彼が先妻とよりを戻したことは、私にとってはとても大きな大きな癒すことのできない精神的な傷なの。この精神的な傷は生涯治すことのできないわ。……

残念なことに子どもたちがまだ小さいから、母親と別れたらかわいそう。……でも、私は去年の秋、彼が家出したあの秋から、もう離婚しようと思っていたのよ。……¹⁰⁶

この文章は、当時の記憶を頼りに、郁達夫と王映霞の破綻のあと書かれたものと思われる。郁達夫の富陽帰郷事件が秋となっているなど、少し事実と異なるところもあり、内容の正確さにいささか疑問もあるが、親友が王映霞から直接聞いた言葉として、彼女のショックの大きさを窺い知ることのできる資料ではあろう。少なくとも、この事件が、離婚を考えるほどの決定的打撃となったことは確かであろう。

実は、郁達夫の帰郷に関しては、孫荃の側から記した文章もある。¹⁰⁷それによれば、3月中旬のある日、郁達夫が突然富陽に帰ってきた。久しぶりの妻子に対して、郁達夫はとてもうれしそうで寛いだ様子であったが、孫荃は客人のように礼儀正しくもてなす一方、寝室のドアに「関係者以外立ち入り禁止」の張り紙をして、郁達夫の入室を拒んだ。郁達夫は岳母の助けを借りても、孫荃の許しを得たいと思ったが、孫荃の心は動かなかった。半月以上の滞在の間に、郁達夫と子どもたちとの間には自然な親子の情愛が生まれていた。郁達夫が上海に帰った後、机に残された紙には、「錢牧齋受人之勤、応死而不死、我受人之害、不応死而死、使我得逢楊愛則忠節兩全矣」と書かれていて、それを呼んだ孫荃の目から、思わず涙があふれ出た。

郁達夫は、確かに孫荃のもとで過ごしたが、王映霞が疑ったような夫婦としての交わりはなかったようである。その意味では、王映霞の怒りは、多分に彼女の誤解に基づくものであったといえる。しかし事実がそうであったのは、愛人の元に走った夫を許せない孫荃の意地と矜持があったからであり、郁達夫にはそうした真摯なけじめはなかったように思われる。因みに、郁達夫が孫荃に残した文章は、錢謙益と柳如是の故事になぞらえて、自分の孫荃に対する愛情がまだ消えていないことを示したものである。

このときの帰郷の理由について、王映霞は、郁達夫が後の文章に書いているような「白色テロ」だの「春服ができたので…」等々のためではない、と断定している。しかし、多くの研究書・伝記類は、同年2月7日に左聯の作家たちが国民党当局に殺害され、危険が及ぶことを恐れた郁達夫が、富陽等の地に難を避けた、との見方を採っている。

たとえば、『風雨茅廬』¹⁰⁸は、時代の閉塞感からくる

憂さを飲酒で紛らわせていた郁達夫が、王映霞から、酒におぼれて人生から逃げてはいけなくなじられて、大げんかとなり、500元の預金証書を持って家を飛び出した。富陽に帰ったのは、当局の眼から逃れられる上に、先祖の墓参りもできるからであった、としている。時局と、王映霞の指摘する飲酒の両方がきっかけとなっているという描き方である。

『感傷的旅行 郁達夫伝』は、富陽行は、純粋に避難のためであった、と述べ、王映霞の怒りを「名門出身のお嬢様としては、『姫妾』扱いされることに耐えられず、疑い深い女としては、郁達夫が彼女との結婚後に別の女（たとえ正妻の孫荃であったとしても）と性的関係を持つことは許せなかったのだ¹⁰⁹と、やや彼女の性格上の問題に帰しているようである。

しかし、王映霞が、法律上は妾という立場に置かれていて、郁達夫の愛情だけが結婚生活を担保するものであったことを考えると、彼女の激しい反応も理解の外ではないだろう。加えて、王映霞は、自分の、そして家の名誉を守るため、友人・知人に対しても郁達夫の出奔を隠さなければならなかった。彼女には、自分の悩みを相談できる人もなく、一人孤独の中で苦痛に耐えるしかなかったのである。

どうやら、この事件を境に、王映霞の心境には変化が生じたようである。それまでの王映霞は、郁達夫が好まない行動は差し控えていたが、次第に友人との往来など自由な活動範囲を広げていった。さしずめ、「あなたが勝手なことをするのなら、私だって好きなことをやらせてもらいます」という心情であろうか。王映霞の手記を見る限り、郁達夫の富陽帰郷事件は、王映霞の夫に対する純粋な思いがプツンと断ち切れた、重要事件であったといえることができる。

3件目は、不可解な家出である。王映霞でさえ、郁達夫が何に腹を立てたのか、思い当たることがなかった。そして、後に郁達夫から聞いたところによれば、王映霞と劉懷瑜が同性愛ではないかと疑い、出奔している間にも、しばしば帰ってきて、門の外で人の出入りを監視していたという。

この事件について、王映霞は1939年に書いた「一封長信的開始」では、次のように述べている。

一・二八事変停戦後、私は彼の同意を得ないで3年ぶりの女友だち A女史 に会いに行った。彼は怒って、半月外で遊んだだけでは気が済まず、私とA女史を痛罵する文章まで書いた。¹¹⁰

上記の説明のように、郁達夫の同意を得ないで会いに行ったから、彼の怒りを買った、というのであれば、まだわかりやすい。あるいは、「同意を得ないで」というのは、『王映霞自伝』のように、快く思っていない彼を無理矢理説得していっしょに会いに行ったこ

とを指すのかもしれない。

いずれにせよ、これが事実ならば、かなり異常な行動であり、異常な精神状態だといえよう。敢えて解釈するならば、夫婦連れだって外出する以外、王映霞が単独で他人と交わることを嫌った郁達夫であるから、たとえ同性であっても、映霞を他人に奪われたような感覚に襲われたのかもしれない。

郁達夫が、王映霞と劉懷瑜の仲を同性愛だと疑ったというのは、王映霞の過剰な思いこみであった可能性もある。郁達夫は、小説『她是一個弱女子』の「後叙」¹¹¹で、この小説の題材は、1927年には考えていたものであるが、今回の上海戦で避難の折、十日の時間を得たので、ざっとあらましを書いてみた、と述べている。そして、小説中の人物や事実は、言うまでもなく全くの虚構である、とも断っている。この言葉を鵜呑みにするわけにはいかないが、少なくとも、この小説の構想そのものは、何年も前から暖めていたものであるから、王映霞と劉懷瑜の親しげな様子を見て同性愛だと疑い、そこから着想を得て作品を書き上げた、ということではなさそうに思える。

同性愛の嫌疑と出奔中の郁達夫の行動は、王映霞にしても郁達夫から聞いたことであり、事実かどうかの認定は難しい。しかし、最低限、このときも郁達夫は黙っていなくなり、しばらくして平然と帰ってきたというのは事実である。

以上、3件の家出事件で見えてきたように、郁達夫は些細なことで、不意に機嫌を損ねたが、これは、現在俗に言う「キレル」状態に近いのではないだろうか。王映霞は、それを彼の持病ととらえていたが、現実には、繰り返される持病の発作によって、妻王映霞の心は深く傷ついていった。郁達夫のこうした行動パターンには、大人の人間としての常識の欠如や未熟さ、妻に対する甘えなどが見て取れる。

(待続)

注

71 『郁達夫外伝』浙江人民出版社、1982年、35～36頁。期日と場所が書かれたのみの、招待状のような招待状でないような案内状で、しかも、1927年冬に受け取ったときには、すでに期日を過ぎていたので、一層奇妙に思ったとある。期日については、孫百剛の思い違いの可能性もあろう。

72 「杭州或日本結婚」(『我与郁達夫』広西教育出版社、1992年、88～90頁)。なお、同様の主旨の記述は、『王映霞自伝』(伝記文学出版社、1990年)・(江蘇文芸出版社、1996年)にも見られる。

73 伊藤虎丸・稲葉正二・鈴木正夫編『郁達夫資料補篇(下)』東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、1974年、204頁。「発信の年が明らかでないが、恐らく1928(昭和3年)年ではないかと考えられる」と註記されている。なお、同書の巻頭に、封筒表書及び手紙(便箋3枚)が写真版で収

- 録されている。
- 74 原文は“設想”。この場合は、「虚構」「便宜的な嘘」といったほうが近いかもしれない。
- 75 『天涯孤舟 郁達夫伝』杭州出版社、2005年、ただし初版は2004年。
- 76 同上書、156頁。
- 77 注73所掲書、199～204頁に、このときの郁達夫たちとの交流の様子を語った「佐藤智慧子氏よりの聞き書」と「日記抄」が掲載されている（佐藤智慧子は春夫の姪）。
- 78 注73所掲書、204頁。郁達夫は月日しか記していないが、註に、スタンプから推して昭和3年と考えられることが、付記されている。なお、この葉書も、先の佐藤春夫宛書簡と同様、巻頭にその写真版が掲載されている。
- 79 『風雨茅廬 郁達夫大伝(下)』中国広播電視出版社、2004年、775頁。
- 80 同じく経済説を採る関連書として、小説『多情累美人』（袁瓊瓊・潘寧東、聯経出版事業公司、2000年）は、創造社で郁達夫のお金がだまし取られたため、日本に出掛ける費用が足りなくなった、としている。
- 81 『東方』1982年第三期。未見。ここでは、郭文友『千秋飲恨 郁達夫年譜長編』四川人民出版社、1996年、830～831頁に拠る。
なお、「半生自述」の時局説を採るものに、以下のような書籍があるが、いずれも危険を知らせた人物を蔣光慈と特定している。
韋凌『郁達夫的女性情感世界』中国致公出版社、2001年、180～181頁。張潔宇・張恩和『風雨情囚：郁達夫的女性世界』河南人民出版社、2003年、290頁。桑達康『紅粉青衫 郁達夫の婚變歷程』台湾出版社、2005年、144頁。
- 82 注71所掲書、36頁。
- 83 注82所掲書『千秋飲恨 郁達夫年譜長編』では、3月9日付け佐藤春夫宛書簡を根拠として、嘉禾里への転居を3月上旬としている。（837頁）
- 84 許鳳才『郁達夫の婚姻和愛情』紅旗出版社、2005年、393頁。
- 85 注84所掲書、394頁。
- 86 注72所掲の『王映霞自伝』2冊は、内容がほぼ同一である。
ここでは、江蘇人民出版社版を底本とする。
- 87 注86所掲書、75頁。
- 88 注71所掲書、42頁。
- 89 注86所掲書、97頁。
- 90 注71所掲書、49頁。
- 91 注86所掲書、77頁。
- 92 注86所掲書、77～78頁。
- 93 注86所掲書、77頁。
- 94 注86所掲書、70頁。
- 95 注86所掲書、96頁。
- 96 注71所掲書、49頁。
- 97 注86所掲書、96頁。
- 98 注86所掲書、73頁。
- 99 注86所掲書、74頁。
- 100 原文は“独輪車”。手押しの一輪車。中央に車輪が一つあり、乗客は左右に分かれて腰掛ける。人力車に比べて運賃が安く、主に貧しい人々が利用する乗り物。
- 101 注86所掲書、79頁。
- 102 『半生雜憶』では、「1930年夏」となっているが、これは1929年の誤りである。なお、注82所掲書『千秋飲恨 郁達夫年譜長編』によれば、この事件が起こったのは、同年7月23日のことである。
- 103 この事件の発生年月に関しては、王映霞の著作の間でも、異同がある。『半生雜憶』は、1931年、『王映霞自伝』（伝記文学出版社版）は、1932年2月10日、『王映霞自伝』（江蘇人民出版社版）は、1932年3月10日となっている。年譜類や郁家側の記述等とも照合すると、1931年2月または3月頃というのが正しいと思われる。
- 104 『半生雜憶』では、王映霞が手紙を書いて救援を求めたのは祖父で、祖父と郁達夫の話し合いの結果、郁達夫は保証書を書き、さらに翌日弁護士と北新書局の責任者を呼んで、「版權贈与書」を書いたとなっている。しかし、「版權贈与書」の作成日は1932年1月であることから、『王映霞自伝』の記述の方がより信憑性が高いと判断される。
- 105 この家出事件は、『半生雜憶』には載っていない。『王映霞自伝』でも、前の2件とは別に章を立てており、章のタイトルは、伝記文学出版社版では「他又出走了」、江蘇人民出版社版では「他真出走了」である。
- 106 署名は、程雪言。初出の掲載誌名、刊行年等は不明。ここでは、温梓川『郁達夫別伝』寧夏人民出版社、2006年、178頁に拠る。
- 107 陸費澄「孫荃心目中的郁達夫」蔣增福編『衆説郁達夫』浙江文芸出版社、1996年、380～385頁所収。陸費澄は、孫荃の息子郁天民の妻である。
- 108 注79所掲書、869～870頁。
- 109 桑達康『感傷的行旅 郁達夫伝』北岳文芸出版社、1991年版、310頁。
- 110 『大風』（旬刊）第34期、1939年4月15日。ここでは、劉心皇編著『郁達夫与王映霞』港明書店、1978年、138頁に拠る。
- 111 『她是一個弱女子』上海湖風書局、1932年初版。ここでは、『郁達夫文集』（第2巻）（海外版）、生活・読書・新知三聯書店、花城出版社、1982年、300頁に拠る。

（平成19年9月18日受理）